

# 平安文学における運命観

A View of Destiny in Heian Literature

有松陽子

- ① 目的
  - ② 運命の原因
  - ③ 運命の推知
  - ④ 運命への働きかけ
- あとがきにかえて

## 【論文要旨】

本稿では、平安文学研究上でこれまで論じられなかった宿世思想以外の運命観に注目し、平安文学において享受されてきた運命観を総合的に考察した。

対象とした作品は物語文学、日記文学、和歌物語などの受領階級以上の女性の手になる文学作品が主である。今回の考察では、平安文学中に見られる運命への受け止めを、「運命の原因」、「運命の推知」、「運命への働きかけ」の3点に注目して、それぞれ作品の用例を確認しながら検討した。結果、「運命の原因」として受けとめられていたのは、宿世思想としての受け止めが圧倒的に多いものの、作品中の重要な局面では神仏の靈験などによっての受け止めも多く見られる他、現報としての受け止めや俗信など、様々な要因を運命の原因と受けとめていたことが改めて確認できた。また、運命を知ろうとする営みは、「運命の推知」として陰陽道、宿曜、観相などの「占いによる運命の推知」、ものごとしや予感、俗信などに示される「兆しによる運命の推知」、夢告や夢ときなどから運命を知る「夢による運命の推知」などに主に分類され、それらを検討した結果、最も一般的に用いられていたのは「夢による運命の推知」であったことが確認できた。「運命への働きかけ」としては、人々は宿世思想によって前世に定められた運命が不変であるという意識が強いながらも、仏教にいそむることによって罪穢を減消させる方法、物詣などの形で具体的願望を神仏へ祈願する他、言忌や俗信的な呪いなど、様々な方法をもって可能な限り運命に働きかける試みをしていることが確認できた。

キーワード：平安文学、運命、宿世、占い、神仏